

第 1969 回定例研究会報告要旨 (10月25日)

## 自由化の中の不自由化

(京都大学) 間宮 陽介

この4・5年、我が国では教育や経済政策での自由化が叫ばれている。しかし、たとえば1960～'70年代の技術者には自由(仕事の中の「遊び」的要素)があったが、今それはない。自由化が叫ばれるなか、逆に不自由なことが増えている。その理由は、第1に自由の意味が変わったこと(個人の自由から組織の自由へと自由の主体が変わった)、第2に「遊び」が締め出されたことである。

第1の点についていえば、まず19世紀半ばから組織の時代に変化した(ウオーリン)。たとえば株式会社制度や主権国家意識も、19世紀にできた。国内では株式会社が取引をし、国際的には主権国家が戦争や取引をするように、組織の時代となったのである。そこでは「裸」の個人が表にでることがなくなった。こうして組織が自由に取引するようになると、組織内に対しては凝集・締めつけが発生した。ここに、個人自由主義は組織自由主義へと変化したのである。

次に第2の点、「遊び」の締め出しである。「遊び」とは、さしあたっての目的はないが、いざというとき役立つものである(これが組織に伸縮自在性を与える)。ここでホイジンガの「遊び」の定義をみよう。「遊び」とは、第1に自由な行動である。第2に日常生活の外にある(ある一時的な活動領域への踏みだし)。第3に時間的・空間的完結性がある(たとえば一年中続く「祭り」はない)。

さらにヴェブレンも、「遊び」について深く考察している。「有閑階級の理論」では、労働はマイナスのシンボル、遊びやレジャーはプラスのシンボルとされる。彼の「遊び」へのキーワードは、idle curiosity(さしあたっての目的はない)、parental bent(親性本能)、instinct of workmanship(いいもの、気に入ったものしか作らない)である。つまり、彼はためにする活動とためにしない活動とを分け、「遊び」は後者に属すると考えたのである。

これはインダストリー(人のためにいいものを作る)という主張でもあるが、それがビジネス原理(もうかるか否か)に侵されているのが現代である。

これら2点の理由から考えると、自由化とは、社会生活のすべてを目的-手段関連に変えようとすることではあるまいか。ゆえに、そこには「遊び」の締め出し、すなわち個人の不自由化が伴うのである。学問・研究・教育も「遊び」を含むが、最近の大学では「遊び」の要素が縮小している。こうして人文学は凋落し、役に立つ(さしあたっての目的のある)工学などが伸びている。

最後に、農業はそれが持つ環境への外部経済効果が大きいから重要であるとの議論に触れる。経済の枠組で農業の存在意義を説明するのもいいが、目的-手段関連ではなく、農業は農業それ自体のためにあると考えてもいいのではないか。たとえばコモンズ研究、歴史・民俗学研究では、生業という言葉がでてくる。これは単なる労働ではない。生業から生活の糧を得てはいるが、それは同時に自然・環境維持の活動をも含んでいる。ゆえに、農業はもうからないからこれをやめてIT産業に乗り換えようといった議論にはならない。農業を維持するためには、経済の教えの外側に立って考えたほうがいいであろう。

(文責 山本昭夫)